兄妹

鈴蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
兄妹

【Ｎコード】
Ｎ８２９９Ｚ

【作者名】
鈴蘭

【あらすじ】
「ほんとうのこころ」の続編です。蘭が小さくなって新一が子供のお世話の仕方を学ぶという感じの作品です。一部、新蘭、平和、快青になっています。どんな方でも楽しめると思いますので…。※これは続編ですので、先に「ほんとうのこころ」を読んだほうがいいと思います。

工藤蓮華（前書き）

続編ですので、ちょっと変なところがあると思います。

工藤蓮華

「お兄ちゃん、私の学校は？」
「確か…帝丹小学校だったな…おれの母校だな。」
「お兄ちゃん、料理できないでしょ？また、作ってあげる。」
「へいへい。」
「はいは一回ときちんとすること。」
「すみません」
「よろしい」
小学二年生の少女と高校二年生の青年。
ここ、工藤邸ではこんな会話があった。
そこに、茶髪の高校2年生の女子が勝手に入ってきた。
「工藤君、妹さんの名前だけど…」
「蘭、だろ？」
「ちがうわ。一ヶ月間の間だけ、違う名前にしてほしいの。」
「なんでだ？」
「仕方ないわ。とにかく、この世に工藤蘭は存在しないということで、工藤…そうね、なんて名前がいいかしら？」
「おい、蘭。なんて名前がいい？」
「そうねぇ…蓮華がいいな。」
「蓮華…か。いいぞ。」
「お兄ちゃんは新一でいいの？」
「あぁ、そうだよな？」
「えぇ、もちろんよ。」
三人の会話は冷めているのかあきれているのか分からないような会話だった。

「あと、毛利蘭っていう人がいるんだけど、その人はあなたの恋人よ。でも、少しの間だけ、この日本にはいないのよ。だからもし、誰かに蘭のこと聞かれたら今はいないって言ってね。」
「あぁ、わかった。」
「あと、蓮華ちゃん、工藤君が何か変なことでも言ったら厳しく叱ってあげて頂戴。」
「はーい！」
蘭、いや蓮華がかわいい声をあげて言う。
その声に新一はやさしいほほ笑みを蓮華に向けた。
「それと、園子と和葉さん、服部君、黒羽君、青子さんにも言っておくから。それじゃぁね、蓮華ちゃん、工藤君。」
「バイバーイ！」
「じゃぁな。」
新一と蓮華が志保を見送ると、志保は大きな音を立ててドアを閉めた。

「蓮華、朝飯。」
「何よ、偉そうに。」
2人はこんな会話をしながら蓮華はキッチンへ、新一はソファーへ行き、本を読み始めた。

そんな静かな時だった。

「らぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！！！！！！！！！！」

大きな長い声が工藤邸に響き渡った。
そして
ドタバタと大きな音の足音がリビングに向かってくる。

「へ？」
「は？」
リビングにいる新一とキッチンにいる蓮華が2人して驚いたようなまぬけな声を出した。

バタンッ

またしても大きな音がロビングのドアを開けた。
「し、新一君！蘭は！？」
「えっと、蘭は…」
志保の言葉を思い出す。
しかし、園子には事情を話すと言っていたので、本当のことを言ってもいいと思ったのか、蘭が蓮華になったことをすべて話した。

「それで？蘭、蓮華ちゃんはどこにいるわけ！？」
「キッチン。もしかしたら、おまえの記憶、ねえかもな。」
「蘭！蘭！！！」
新一の言葉を聞いたのか、園子は急いでキッチンへと向かった。
迷いもせず向かったキッチン。
そこには、かわいらしい小さい頃の蘭がいた。

「蘭…」
「…園子…」

「蘭…呼び捨てに…」
「お姉ちゃん…？」
「ガクッ…」
呼び捨てで呼んでくれなかった蘭に園子はガクッと項垂れた。

「園子お姉ちゃん、どうしてここに？」
「蓮華…ちゃん、あなたは、工藤蘭…ね？」

「そう・・・だよ？」
「なら、あなたは蘭でいいのね？」
「どうしたのさ、みんなで。」
「いいの、いいの。こっちの話。」
「おかしいね、そこに隠れてるんでしょ？和葉お姉ちゃん、平次お兄ちゃん、青子お姉ちゃん、快斗お姉ちゃん…じゃなくてお兄ちゃん。」
蘭がキッチンの柱に隠れてる四人を呼んだ。
そして、見事に四人いた。
「あのなぁ、蘭ちゃん、俺は、お姉ちゃんじゃないぞ？お兄ちゃんだ。」
「だって、いつもお姉さんのカッコして私やお兄ちゃんに会いに来るじゃない。」
完全に子供の蘭。
女子群は可愛いと思い、男子群は項垂れている奴もいれば感心している奴もいた。
「蘭ちゃん、ほんま可愛えなぁ！」
「ほんとほんと！青子と大違い。」
2人は嬉しそうに見ていたが、園子は怒りに震えていた。

「たしかさぁ、これ作ったの志保だったよね？」
怖い声を出して窓から見える阿笠邸を睨む。
その様子に蘭はビクッと肩を震わせた。
「志保お姉ちゃんが…どうかしたの？」
「あなたの体を…！！！」
園子の説明を後ろにいた志保が口を手で覆った。
「園子、私を憎んでるみたいね。」
「はたりまへでひょ！ひゃんをひいはくひはんはから！」
（正しくは「当たり前でしょ！蘭を小さくしたんだから！」です）
「何言ってるのよ…」
志保はあきれ半分で園子を離した。
園子は息切れしたらしく、息が荒かった。
「志保、私を殺す気！？」
「そうね、そのほうがよかったかもね。」
「志保ぉぉぉ！？」
「冗談よ。」
冗談とは見えないそぶりで蓮華に近づく志保。
「蓮華ちゃん、阿笠邸に来てくれるかしら？」
「阿笠博士、いる？」
「もちろんよ、そのために呼んだんだから。」
「おい、何の騒ぎ…はぁ！？」
新一がやっとキッチンに来たが、志保、園子、平次、和葉、快斗、青子が勝手に入っているということで新一は驚きと怒りを隠せない様子だった。
「お前ら…勝手に…」
「ええやんけ、俺ら親友やろ？」
「新一、そうやって怒るから私が嫌いになるのよ！（蘭の声）」
快斗が蘭の声を使ってしゃべったことにより、新一の頭にある火山は噴火した。

数時間の男の悲鳴が工藤邸に響き渡る…

工藤蓮華（後書き）

誤字脱字、教えてください。
感想待ってます。

帝丹小学校にて

「はーい、みんな、今日から新しいお友達が来てくれます。女の子です。」
小林先生はそういうなり、黒板に「工藤蓮華」と書いた。
工藤蓮華と読めない人のために「くどう　れんげ」と隣に書いた。
「はーい、入ってきていいわよ！」
先生が教室のドアに向かって話しかける。
転校生、工藤蓮華は小さな手でドアを開けて、コツコツとはいってきた。
「ク、工藤蓮華です。よ、よろしくお願いします。」
「よ、よろしくー！」
男子たちは顔を赤くして一斉に言った。
なにせ、蘭が小さい頃ですからとてもかわいいのである。

女子の半分が「よろしくー！」と言っていたが、もう半分のほうは嫌味のような目つきで蓮華を見つめていた。
「なんかさぁ、かわい子ぶってない？」
「うんうん」
「江戸川君さえいてくれればなぁ…」
「そうそう。江戸川君がいなくなってからさぁ、私たち相当変わったよね？」
「そういえば、少年探偵団・・・とかいったっけ？」
「あぁ、あの人たちね。」
グループの人が一斉に元太、歩美、光彦を見る。
視線を感じたのか、歩美がそのグループのほうへ目を向けた。
しかし、そのグループはフンッとそっぽを向いた。
「江戸川君にもう一度会いたい…」
「えぇ」

グループはそんな会話をして授業に取り組んでいった。

休み時間になると、蓮華の周りは男子でいっぱいだった。
「ねぇ、好きな色は！？」
「赤だよ？」
「好きな動物は？」
「たいてい、全部好き。」
「むこうの学校に友達いた？」
「えーっと…いたかな…」

そんな質問攻めに蓮華はサラリと答えていった。

しかし…

「じゃぁさ、蓮華ちゃんに好きなこいた？」
「好きな…人？」

いたような…

いなかったような…

一緒にいたような…

あれ？

思い出せそうなのに…
思い出せない。

そして、お兄ちゃんの顔が浮かんでくる。

どうして…？

「んげちゃん？

蓮華ちゃん！」

ハッ…

気が付いたら目の前にはどこかで見たことあるような顔の子がいた。

「あなたは…」

（ーーちゃん！いこうか。）
（ーーおねえさんはーーお兄さんのこと好き？）
（ーー君のこと好き？）

なんだろ…今の…。

「私の名前は、吉田歩美。あなた、蘭お姉さんに似ているね！」

「確かにそうですね！」
「蘭お姉ちゃん知ってるか？」
「蘭…お姉ちゃん？」

聞いたことある…いいえ。私の本名。

工藤蘭。

「どんな人？」
「毛利蘭と言って、すっごく美人さんなの。」
「新一兄ちゃんの恋人だよ！」
「新一…お兄ちゃんの？」
「そう！蓮華ちゃんが大人になった感じ！」

「そう…なんだ…」
新一お兄ちゃんの恋人さん…

あってみたい…

こうして、私の生活は一週間過ぎて行った。

帝丹小学校にて（後書き）

感想待ってます！

久しぶりの再会

「工藤君、これをのんで。」
志保が新一に薬を渡す。
その薬は名無しのあの薬。
新一はわからないまま志保によって飲まされてしまった。
（うぁ…）
新一は心の中で悲鳴を上げてその場に倒れた。志保はそのまま倒れさせたままにして、新一の様子をうかがっていた。

数時間後

「ン…？」

ここは…どこ…いや…俺の家だ…

蘭は？

「工藤君」
「宮野？」
「蘭のことだけど。」

「蘭に何かあったのか！？
「いい？今からいうことは受け入れることはできないかもね。蘭さんはあなたの妹になったわ！」
「はぁ？蘭は俺の彼女だっつーの！」

この会話で分かっただろうか？

新一は志保が解毒剤を飲ませたおかげで元の正常に戻ったのだ。

「もうすぐ蘭が返ってくるわ。」

数十分後・・・

ガチャッ

「ただいまー！」

なつかしみのある声が工藤邸に響き渡った。

「蘭…？！」

新一は半信半疑のまま玄関へ向かった。

そこには小学生のころの蘭がランドセルをしょって玄関に立っているのだった。

「蘭！？どうして…」

新一は何がどうなっているのかわからず、ただあたわたしているだけだった。

「お兄ちゃん？」

「はぁ？蘭、どうして…」

「どうかしたの？」

新一は言葉を失った。

蘭は新一の妹と勘違いしている。

「工藤君、ちょっと。」

志保は無理やり新一をリビングにつれて今までのことを話した。

「そう…だったのか…」

「工藤君、蘭はあなたのことをお兄さんと思っているわ。これ。」

志保がカプセルを新一に預けた。

「これ…蘭があなたのことを兄とは思う薬の解毒剤。」

「ＡＰＴＸ４８６９のは？」

「一ヵ月で終わるわ。そうね、あなたもＡＰＴＸ４８６９をのんで。

」
「はぁ？」
「蘭一人にさせるの！？」
「いや…」
「なら、ちゃんと飲んでね。」
志保はそういうと工藤邸から出て行った。

「らーん！」

「何？」
「これ、飲んでくれ。」
「どうして？」
「いいから…」

「う、うん…」
蘭は水とともにその薬を飲んだ。

（いや…なんか…いやぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！）

蘭はその場に倒れ数時間の眠りについた。

数時間後、蘭は目覚めると自分の体に異変を感じた。

高校生のはずがなぜか肌がふんわりしていた。

目の前を見てみるとそこにはコナンがいた。

「こ、コナン君！？」

そんなはずはない。

コナン＝新一
なのだ。

なのに…どうして？

「コナン君…どうして…ていうか、私…」
「蘭、俺たちは小さくなったんだ。」
「解毒剤は？」
「いや、一か月間かかって戻るらしい。」
「よかった。」
「お前は、工藤蓮華。おれは江戸川コナン。」
「じゃぁ、よろしくね、コナン。それと、どうせ、志保が作ったんでしょ？」
「正解。」
新一の言葉に蘭は浅いため息をついてコナンに抱き着いた。

「わっ！」
新一、いやコナンはいきなりのことで驚いた。

「コナン君に会えた・・よかったぁ…」
蘭の目には涙がいっぱいだった。

コナンは優しく蓮華を包んで揚げた。

その後、先ほどのことおを大阪カップル、江古田高校カップル、園子に伝えた。

久しぶりの再会（後書き）

感想待ってます！

江戸川コナン、再登校

「コナン、行こうよ！」
「ったく…よく教科書とか残ってたよな…」
今日から新一は江戸川コナンとして小学一年生として帝丹小学校に通う。

もちろん、蘭も一緒だ。
蘭、蓮華はコナンもいることにより、安心感があった。
「コナン、歩美ちゃんたちに会いたかったんでしょ？」
「まぁ…そうだな…」
コナンは久しぶりに会えるという気持ちでうれしいようないやなような複雑な気持ちになっていた。

帝丹小学校の登下校の道を歩いていると少年探偵団が2人のもとにやってきた。
「蓮華ちゃ…」
「蓮華〜…？」
「蓮華ちゃん…？」
みんな蓮華のほうを向いていたが、蓮華の隣にいる男の子を見た途端、彼らは確信した。

「「「コナン君！（コナン！）（コナン君！）」」」

江戸川コナン、一年前に帝丹小学校に通っていたが、一年後、すぐに姿を消した。
灰原哀とともに…

しかし、歩美が蓮華とコナンが一緒にいるのに目を向ける。
どうやら、蓮華をライバルだと思ったらしい。

「蓮華ちゃん、コナン君と知り合い？」
「え…えーっと…」
「友達…って言ったほうがわかりやすいかな？」
「ふぅーん…いつ出会ったの？」
「へ？あぁ…一週間ぐらい前だったかな？」
嘘
本当はずぅっとまえから。
幼馴染だから１７年間ずっと一緒にいる。
２人は全然違うことを話している。
しかし、それが歩美にとっては好都合だった。

（蓮華ちゃんより…歩美のほうがよくコナン君のこと知ってる。）

そう思った歩美はコナンにいきなり抱きついた。

「コナン君！会いたかったよぉ～！」
二年生になった歩美はこういう計画を立てられるようになった。

コナンが今でも好き。
大好き。
自分を守ってくれる人。
だから…だから…

蓮華には負けられない、そういうおもいが歩美の心を換えて行った。

「お、おい、歩美ちゃん！」
コナンは嫌がっている。
それを見た蓮華が
「歩美ちゃん、コナンが嫌がってるよ？離してあげたら？」
と優しく言った。

『コナン』と『コナン君』

歩美はその違いに気づいてしまった。

たった一週間の付き合いでどうして呼び捨てなのか。

コナンは嫌がってないのか？

そう思った時、歩美はすぐさま泣いてしまった。

「う、ウェぇぇぇん！！」

「あ、歩美ちゃん！？」
「歩美？」
少年探偵団とコナンと蓮華はいきなり泣き出した歩美にあたわたしていた。

「とにかく、落ち着かせよう！」
蓮華はそういうなり、歩美の手を取って学校へ走って行った。

学校に着くと、２人が走っているので見る人はすごく振り返りながら登校していた。

２人は走って保健室へ行くと、保健の先生が優しいまなざしで歩美が泣きやむのを待っていた。

蓮華も同じだった。

蓮華は、体が小さくても心は高校生。

面倒見のいいお姉さんなのだから優しい目をして歩美を見ていた。

「工藤さんったらなんだか高校生に見えるわね…」

「え？」

蓮華はギクッと思いながら一生懸命違うと言っていた。

保健の先生は「はいはい」と優しく言ってくれた。

先生の年代は５０。

おばさんなのでみんなから好かれている。

そんな会話をしているうちに歩美が泣きやんでいった。

すると、歩美はいきなり蓮華の腕を引っ張って

「私…蓮華ちゃんに話があるんです…っすみませんでした…っ」

半ば泣いていたが先生は不安がらずに「わかりました」といった。

歩美が蓮華の腕を引っ張って人気のないところに連れていくと同時にチャイムが鳴った。

蓮華はやばいと思ったが歩美がかまわず話し始めた。

「蓮華ちゃん…歩美はコナン君のこと好き。」

「歩美ちゃん…」

「蓮華ちゃんはどうなの？歩美、蓮華ちゃんのことよく知らないけ

ど、蓮華ちゃんのこと、ライバルだって思う！」
「私も好き…大好き！コナンは私を命がけで守ってくれたし…」
「それだけ？それだけで好きになったの？」
「それだけ…ってわけじゃないけど、コナンの全部が好きだな…」
「え…？知ってるの？コナン君の全部を…」
「さぁ…あいつのことは全部知ってるつもり。」
蓮華はそういうとにっこり笑って歩美の手を引き、教室へと向かった。

（蓮華ちゃんのばか…）

歩美はそう思うと同時に蓮華を階段のところで突き飛ばしていた…

江戸川コナン、再登校（後書き）

感想待ってます。

事件

「キャ・・・」
蓮華は小さな悲鳴を上げた。

それはその場にしか聞こえないような声。

蓮華は気を使った。
本当のところ、大きな声を出しているところだが、大声を出したら
みんなが来てしまって歩美に被害がかかる、そう思うと蓮華は静か
に目を閉じた。

スローモーションのように蓮華は下へ下へと落ちて行った。

「蓮華ちゃんの…せいなんだから…っ」

歩美はそういうなり蓮華をそのままにし、その場を去って行った。

「歩美…ちゃん…ごめん…ね…」

小さくほほ笑むと蓮華は目を閉じたまま意識を失った。

蓮華1人、会談の一番下で倒れていた。

歩美は走って教室へ向かうと歩美の計画は始っていた。
「先生！大変なんです！蓮華ちゃんが…っ蓮華ちゃんが・・・っ」
歩美は演技で大変そうに言った。
「蓮華がどうかしたのか！？」
一番最初にいったのはコナンだった。
歩美はそれに傷ついたがそれを隠して事情をすべてコナンに話した。
コナンは事情を聴くと走って会談へ向かった。

「蓮華！！！」

コナンは蓮華に近づくと頭から血を流している蓮華がいた。

「おい、しっかりしろ！蓮華！」
「…し…新一…？」
「蘭…よかった…今すぐ保健室に行くぞ！？」
「ごめんね…」

コナンは蓮華をおんぶすると走って保健室へ向かった。
保健室では大騒ぎとなった。
「蓮華ちゃん、誰かに突き飛ばされた覚えは？」
「…」
蓮華は答えようとしない。
歩美のせいにすれば歩美が苦しむ。
「私が…勝手に転んでしまっただけなんです…。」
「本当なの？」
「はいっ…そうに違いないです。」
「そう…よかった。」
先生は安心して蓮華の話を聞いていた。
しかし、蓮華は知っていた。
歩美が自分をつき落とし、殺そうとしたことを…

「蓮華！大丈夫か？」
「うん！全然平気！」
蓮華はにっこり笑ってそういった。

捜査開始

しかし、コナンは誰かが蓮華を突き落したのだと確信していた。
たしかにドジっぽい蓮華だが、階段から落ちてもあそこまで大量の血が出ることはない。
病院は行かなくても大丈夫と言っていた蓮華だが、やはり痛そうだ。

（おかしい…）
コナンはそう考えていると一人の少女にぶつかった。

「あ…ごめ……？！」
「あら…」
「灰原？！」
そう、そこには宮野志保のはずの灰原哀が立っていた。
コナンは何が何だか分からなくなって頭が混乱寸前だった。
「ごめんなさいね、驚いたでしょ？」
「驚くも何も、どうして…」
「工藤君、説明はあと。蘭が階段から落ちたんですってね。」
「あ、あぁ…」
コナンは哀の言葉に少し言葉が詰まった。
ほんとうは違う、そういいたかった。

「あら…なんだか違うみたいね。」
哀はわかったようだ。
しかし、コナンは半信半疑のまま哀に自分の意見を話した。
「たぶん…蘭は何者かによって突き落とされたんだ。」

「蘭は…知ってるんでしょ？」
「多分…な。」
「どうしてそれを言わないのかしら？」
「庇ってるんだろ…あいつ、そういうお人よしだからな…」
コナンの言葉に哀は同情した。
確かにそうだ。

蘭は人が苦しむ姿を見たくない。
だからこそ、命を張ってもその人を守り抜く強さがある。
そういう優しさは時に、憎しみを持たせてしまうのである…

「とにかく、蘭に会いに行くわ。確か…蓮華、よね？」
「あぁ、そうだ。」
二人は急いで蘭のいる２－Ｂの教室に向かった。
「蓮華！」
「あ…し…じゃなくて…」
「哀でいいわ！」
「どうして・・・？」
「あなた、階段から落ちたらしいわね。」
「うん…なんかドジっちゃって…」
蓮華はテヘッと頭をこすった。
でも、それは作っていると二人は同時に思う。
蓮華は庇っている。
犯人をかばっている。
そんな時コナンのファンらしき人がコナンに近づいた。

「コナン君！戻ってきてくれたのね！」
「わたしたちのコナン君！」

「キャーーッ！」
コナンファングループがコナンに抱き着いてくる。
しかし、それは蓮華への見せつけ。
コナンと仲が良いことによりそうやっての嫌がらせが蓮華を襲う。

「やめろよっ！！」

考え中だったのか、コナンはいつもよりも不機嫌だった。
しかも、この中に犯人がいるかもしれないというのに…。
しかも、最愛の蓮華、いや蘭が階段から突き落とされたのである。
ジッとしていられないはずだ。

「こ、コナン君…？」
女子たちも当然の驚き。
今までに見せたことのない表情だったからである。
「そりゃそうよ！コナン君は今、考え事してるんだから！」
そういったのは歩美だった。
そういってコナンに自分のほうを向かせようとの作戦。

歩美が蓮華の目の前を通った時、蓮華は悲しみと怖さの複雑な表情を見せたのを哀は見逃さなかった。

「あ！哀ちゃん！会いたかった～！」
歩美はそういうなり哀に抱き着いた。
哀は少し力を込めながら抱きしめてあげた。
蓮華はそれを見ると、そっと教室から出ようとした。
コナンの合図とともに哀は走って蓮華を呼び止めた。

「蓮華、ちょっと話があるわ」
「哀・・・」

蓮華は哀に手を引っ張られ、廊下で話を始めた。

「単刀直入に言うけど、あなた、もしかして吉田さんに突き落とされたんじゃないの？」
「何を…っていうか、どうして私が突き落とされたって知ってるの？」
「突き落とされたの？」
「あ…っ」
蓮華は口走ってしまった。
自分が何者かに突き落とされたということを。
「突き落とされたのね…」
「それよりも、どうして志保が小さく？」
「これは４８時間の薬。二日間この学校にいるつもりよ。それで、久しぶりに学校に立ち寄ったら大騒ぎになってたから先生を呼び止めて聞いてみたってわけ。」
「どうして？どうして小さくなったの？」
「実験よ。４８時間・・・薬が切れるか切れないかっていうね。」
「そう…」
蓮華は少し不安げの顔をして哀を見つめた。
「ん？何？」
「もし、今薬切れちゃったらどうするの？」
「大丈夫、２４時間は確実だから。」
「よかった。」
蓮華は安心感でいっぱいになった。
しかし、どこか複雑である。
やはり、あの階段事件である。

「それで？誰がやったの？」
「・・・言えないよ…」
「言えないってことは友達ね。」
「え…」
「あなたは誰にでも優しくするけど、いうときは言うわ。ただし、知らない人をね。
つまり、クラスメートと考えられるわね。そして…そこからあなたが吉田さんとすれ違った時の表情。吉田さんが関係あるみたいね…」
志保の推理は大当たり特等だった。

蓮華は何も言えずただ、うつむいているだけだった。
志保は痺れを切らし、どうにか吐かせようとした。

「蘭、お願い、あなた…自分を傷つけた人を許せるの！？」
「…」
「…工藤君…許さないわ…あなたを傷つけた犯人(ひと)を…」
「…」
「黙ってないで…本当のこと言って…私はあなたが苦しんでいる姿が一番嫌なの…！お願い…言ってよ、蘭。」

「…新一が…おこるでしょ…？」
「蘭…？」
「新一が…その人のこと許さないでしょ？」
「そうね…そうかもしれないわね…」
「だから言えない！新一が…おこるのが一番嫌！その人がかわいそうだし…新一に余計な心配かけちゃうもん…」
「蘭…」

蓮華の言葉に哀は何も言えることはなかった。

そのまま、犯人の名前は出ることがなく、時は過ぎて行った。

捜査開始（後書き）

感想待ってま～す！

推理

コナンは蓮華が付き落とされたとみられる、二階の階段の真ん中にいた。

きっとここで突き落とされたはずだ。

コナンはそういうと、どこからか、虫眼鏡を出してそっと階段のところにあった上履きでこすったような跡を見つけた。

学校の怪談ではたいてい、児童がけがをしないように角の所にカバーみたいなのをしてある。

そこにこすれたような青いかすとともに跡があった。

「やっぱり上履きのものだ。かずかだけど、ゴムっぽいのがる。」

「やっぱり…この学校の児童みたいね。」

「あぁ…青い上履き…そう、俺達の学校では上履きのつま先の部分が青くなっている。たぶんここで、蓮華は突き落とされたんだ。これは…犯人のものか、蓮華のものか…。」

「可能性としては蘭のほうが高いはね。」

「そうだな、突き落とされたときにこすれたものか、何らかの原因に犯人がつまずいたか・・」

2人して一生懸命考えていた。

蓮華、いや蓮華のことだから、2人は一生懸命になるのは無理ないだろう。

「蓮華…吐かなかったわ。」

「やっぱりな。蓮華はそういう奴じゃないからな…」

「……あなたが怒るからって…」

「へ？」

「あなたが怒鳴って怒るから…犯人に怒鳴り散らすから…蓮華はそれを見るのが一番嫌なんだって。」

「…」

「蓮華は…あなたが大好きでしかたないのよ。あなた、付き合ってるんでしょ？」
「あぁ、俺も…愛してる。」
「そうなら…蓮華が思っていること、理解してあげたら？」
「でも…」
「あとは、あなたの勝手にして。犯人…わかってるはずよ？証拠はなくても…私にもわかってるわ。」
哀はそういうなり、その場から立ち去って行った。

窓から見える、太陽に光がコナンを照らし出す。
すべては空が知っている。
でも、しゃべりはしない。
だから、自力であぶりだすのだ。
最愛の人を傷つけた、最低な奴(犯人)を…。

「コナンくーん！」
そこへ、歩美がコナンのもとへ走ってきた。
「あ、歩美ちゃんか？」
「コナン君！蓮華ちゃんは？」
「…さぁ？」
「そう…」
「なぁ、歩美ちゃん。蓮華を見つけた時、どこにいた？」
「どこって…保健室よ。」
「二階から落ちたんだぜ？蓮華は歩美ちゃんを迎えに行ったんだ。歩美ちゃんと一緒に教室行ったときに蓮華が転んだとしても、落ちたのは人間では速いスピードだ。しかも、どうして悲鳴を上げなかった？そして、たくさん呼びかけるはずだ。少年探偵団だろ？それぐらいはできるはずだぜ？」
「そ、そんな暇なかったの。とにかく、教室に行こうって…」
「どうして、会談のすぐそばにある、特別学級の教室にいる先生に

いわなかった？」
「い、いなかったのよ…」
「いや、いたさ。先生に確認したところ、その時は児童と折り紙をしてたそうだ。音は聞こえたが、あまり気にしてはなかったらしい。」
「何が言いたいの…？」
「つまり、歩美ちゃんが蓮華を突き落としたんじゃないかって。」
コナンの言葉に歩美は言葉を詰まらせた。
確かにコナンの言うとおりだ。
特別学級の先生に言うほうが一番速くて一番保健室に近いのに、どうして、二階にある、２－Ｂの教室までいったのだろうか。
「し…証拠は？！私がやったっていう証拠は？」
「歩美ちゃん…蓮華がいるよ。」
「…！」
「蓮華…歩美ちゃんとすれ違った時、哀しいような怖そうな顔してたんだ。あいつがそんな顔するのは不安な時、そいつに何かされた時だけだ。俺は、歩美ちゃんを仲間だって思ってたぜ？」
「私だってそう思ってるもん！だからそんなことするはずないじゃない！」
「蓮華が…犯人のことを言ったら？」
「…」
「蓮華は…俺が頼めばいってくれるよ…」
コナンは静かな声で言った。
歩美は荷も言えず、ただ、黙ってうつむいているだけだった。
「蓮華ちゃんが…憎かったのよ…蓮華ちゃんなんか…いなくなっちゃえば…いなくなっちゃえばよかったのよ…。コナン君と親しい蓮華ちゃんが、コナン君のことを呼び捨てにしている蓮華ちゃんが、大大大嫌いだったのよぉ！！！蓮華ちゃんより、私のほうが先に出会ったんだし…！」
「先に出会おうが、俺は…蓮華を愛してるよ…」

「コナン君…！」
コナンの言葉に歩美は動揺を隠せなかった。
コナンは少し顔を赤くして天井を上げた。
歩美にはどう見えてものろけにしか見えないことだった。
「悪いけど、蓮華はおまえが犯人とはいってないんだぜ？」
「え？」
「蓮華は言わないぜ？そういう優しさがあるからな。」
「どうして…？私悪いことしたのよ？」
「蓮華はそういう奴なんだ。」
「バカだな…」
歩美はそういうとごめんなさいと泣いて謝り、蓮華の居場所を聞いて、謝りに行った。

蓮華は歩美の言葉に笑顔で受け止めた。

そして、
「これからも仲良くしよう？！歩美！」
といったのであった。

歩美には考えられないことだった。
怒られるかと思っていたはずが、仲良くなろうと笑顔で言われ、ついには呼び捨て…。
歩美は泣きながら笑顔でうなづいた。

ここで、一つの友情が芽生えた。

（蓮華ちゃんって…蘭お姉さんに似ている…）

推理（後書き）

歩美ちゃん…気づいてしまうのか?…!
次回は明日!
感想待ってます!

実験の続き

蓮華とコナンが縮んで、二週間がたった時だった。
歩美がにっこりしながら蓮華とコナンに近づいてきた。
蓮華は何か話があるのだと思って、歩美と目を合わせる。
逆に、コナンは蓮華の、「階段事件」により、歩美を避けている。
「蓮華！よかったら明日の土曜、６時に博士の家に集合のトロピカルランド行かない？コナン君…も！」
あの事件があってから、蓮華と歩美は呼び捨てで呼び合うようになった。
歩美は、コナンも一応誘ったが、まだ不機嫌らしく、あまり、歩美の言葉を聞いていない。
「う～ん…お父さんとかに聞いてみる。」
「そっか！じゃぁ、行けたら私の家に電話して！はいっ、電話番号！」
歩美はすぐに自分の家の電話番号を紙に書いた。
蓮華はそれを受け取り、自分の筆箱の中にしまった。
教室には、女子が、校庭には男子が大勢いる。教室では、二年であろうとも、恋バナ、友バナなど、たくさんしている。
その中に、蓮華と歩は仲良さげにしゃべっているのであった。
「そういえば、哀ちゃんは？」
話の途中に、歩美がつぶやくような声で蓮華に言った。
「え…？あぁ…哀はちょっと、用事があるからって転校っていうより…休学かな？」
「キュウガク？」
「あぁ、学校を長い間休むってこと。」
「ふぅーん…博士の家にいるかな？」
「へ…？さ、さぁ？私にもわからない。」
まさか、宮野志保に戻った、なんてこと言えるはずがない。

蓮華はそう思いながら何とかごまかしていた。
歩美はまた、不振がらずに、会いたいなという気持ちを大きくしていた。
「ねぇ、コナン！トロピカルランド、行こうよ！」
「俺はいいって。」
「何よ…じゃぁ、ご飯作ってあげない。」
「あ！行きます行きます！」
コナンの言葉を聞いて、蓮華はジト目でコナンを見つめた。

そんなこんなで、土曜日、トロピカルランドへ行く日が来た。
蓮華とコナンは、毛利探偵事務所に（コナンは居候、蓮華はもともとの家）住んでいた。
蓮華が父、小五郎にお願いと頼み、小五郎は、小さい頃の蘭のかわいさに負け、そくＯＫしてしまった。
小五郎は、２人がいない間に麻雀へ行こうとしたが、そこへ、蓮華、（蘭）の母、妃英理がきてしまい、麻雀へ行くことはなかった。

阿笠邸前―
蓮華とコナンは走って阿笠邸前に向かった。
集合時間まであと五分。
２人は全力疾走で向かって言った。
「「ハァハァハァ…」」
２人が、阿笠邸間に着いたのは、六時ぴったりだった。
２人の息の荒さに少年探偵団はあきれていた。
と、そこへ…

「あらあら…平成のシャーロック・ホームズさんもやっぱり、息が荒くなるなんてかわいそうにねえ

２人は、聞いたことあるような声だったので、恐る恐る振り返った。

「えええええ！！あ、哀！？」

「何で…！？灰原…！？」

２人は相当驚いていた。

コナンはあまり、説明を聞いていなかったが、蓮華は４８時間の薬のはずが、もうとっくに４８時間過ぎているこの時間になぜ、まだ宮野志保に戻ってないのかが不思議でたまらなかった。

「どうしてぇ！？だって…薬は…」

蓮華は哀とこそこそ話でやり取りし始めた。
「４８時間言った理に戻ったんだけど、つぎは、一週間試すっていう実験よ、あんまりおどろかないでよね・・・」
哀はあきれ半分で言った。
哀が自分の目の前にいることにより、歩美は勢いよく哀に抱きついた。
「哀ちゃ―ん！もう…会えないのかと思ったよぉ～！」

「あなた…蓮華に謝ったんでしょうね？」

歩美にしか聞こえない言葉で哀は静かに言った。
予想外の言葉に、歩美はドキッとしながら、「うん…」といった。
哀はそれを聞くと
「よかった」
とつぶやいた。

そして、阿笠邸前から、アガサ博士の愛車、「ビートル」でトロピカルランドまで向かった。

実験の続き（後書き）

哀「吉田さん…謝ってくれたみたいね。」
鈴「そりゃ、本当はやさしい子ですから～」
哀「事件起こさせたのは、あなたでしょ？」
鈴「そうだっけ？」
哀「とぼける気？（怒）」
鈴「すみません…」
蓮「まぁまぁ…」
哀「蓮華、あなたはお人よしすぎ。」
蓮「そう？ふつうでしょ！」
鈴「蓮華ちゃんの普通はあんまり信じられない…」
蓮「どういう意味？」
哀・鈴「そういう意味。」
蓮「は、ハァ…」
とにかく、感想待ってます！

疑問

トロピカルランドに着くと、仲はもう満員電車のように人がいっぱいいた。
少年探偵団、蓮華、コナンははぐれないようにしっかり、博士についていった。
やっと、あまりひとの少ないところへくると、ふぅ～っとため息をついた。
「みんな、おるか？」
「え～と…コナン、歩美、光彦、俺、哀…あれ？蓮華がいねーぞ？」
元太の言葉に一同はハッとしてあたりを見回した。
特にコナンと哀は一生懸命だった。
「蓮華ーっ！」
「蓮華ちゃーん！」
「蓮華ーっ！」
「蓮華ちゃ～ん！」
「蓮華ーっ」
上からコナン、歩美、哀、光彦、元太が人ごみの中を一生懸命呼びかけた。
しかし、蓮華の声をした返事は帰ってこなかった。
コナンはあせりまくって走りまくって汗がダクダクだった。
「工藤君、みつけた？」
「いや…いねぇ…」
コナンのあせった声に、哀も余計あせった。
この人ごみの中、たった一人を見つけることは無理ではないが、大変なことである。

その時、コナンはもしかしたらと思い、あの、コナンファンなら知っている、広場に行ってみた。

「蓮華！」
コナンは勢いよく走ってきた。

「蓮華！！」
広場に来て、人ごみの中をもう一度叫んだ。

「ガヤガヤ」
「ざわざわ」
「おとーさん！あっちいこうよぉ～！」
「わ～！かわいー！」
人々の声が聞こえる。
ただ、それだけだった。

聞き覚えのある、かわいらしい、明るい声が聞こえてくることはなかった。

「蓮華…！」
外れていた。
蓮華はここにいない。

「工藤君！蘭は？」
「…いねぇ…」
「そう…」
コナンの言葉に哀はうつむいた。
哀は、コナンをいったん人気のないところへ連れて行き、自動販売機でコーラを買ってきた。
そして、コナンに渡す。
哀もジュースを買って飲みながら二人で話し合った。
「ねぇ、蘭が行くところはもうないの？」
「スケート場…」
「スケート場…ね…」
「でも、たぶん違う。ただ単にはぐれてる可能性が高いんだ。」
「そうね…蓮華、どこ行ったのかしら？」

2人はまた深く考えた。
と、その時、少年探偵団が二人のもとへやってきた。
「おまえら、休んでねーで、さがせよ！」
「お前らなぁ…もうちょっと考えろ、蓮華が行きそうなところとか、いそうなところとか…」
「それがわかれば僕たちも探しませんよぉ…」

また、少年探偵団、コナンで悩んだのであった。

その時だった。

「お譲ちゃん…だれか探しているのかい？」
「え…？うん、友達を探してるの。」
「おじいさんも探そうか？」
「いいです。私一人で…探せます。」
「なら…おじいさんと一緒に死のうか…」
「え…？」
そういったとたんだった1人の少女を抱きかかえ、周りにこう言った。
「てめぇら！今すぐどきやがれ！！！さもなければ、こいつの首がはねちまうぞ！」
さっきの老人とは違った言い方で周りに叫んだ。
みんな、それを聞いて一斉に老人と一人の少女に視線を向けた。
「いやぁ！はなしてぇ！」
その声は、まぎれもなく、蓮華だった。

「蓮華！」
コナンが一番初めに声を出した。
いくら空手をやっているからって今は子供、どう力が弱まっているか分からない。」
「コ、コナン…！？」
蓮華は涙目でコナンを見つめた。
老人は変装マスクを外し、本来の若い顔を出した。
いかにも悪人面。
そして、ナイフを振り回すと、周りの人たちは悲鳴を上げるなり逃げ始めた。
男は蓮華を連れて、トロピカルランドにある、ジェットコースターに向かった。
ジェットコースターで自殺するつもりらしい。
なぜ、客をどかすのか分からないが、とにかく、タイミングを見計らって自殺するのだ。蓮華とともに。

コナンたちはその犯人の後をつけて行った。
しかし、すぐに見つかってしまった。

「てめぇら…死にてぇか？なら…」
男が手を伸ばす。
その手は、哀へと向かっていた。
「哀！」
蓮華が叫んだ。
蓮華の声に気がつく哀。
遅いと思ったときに蓮華が急いでその男の腕をけった。
「…つってめぇ・・・いい度胸してんじゃねぇか…」
ナイフで蓮華の首に刺そうとする。
「おね・・がい…みんなには手を出さないで…」

蓮華は涙目で言った。
男はニヤッと笑ってジェットコースターの座席に乗った。
蓮華は怖そうに目をつぶった。
つぶった時に一筋の涙が流れた。
「蓮華！！」
コナンがそういったとき、コナンは、ジェットコースターの座席の後ろにつかまり、２人の様子を見ながらキック力増強シューズを起動させ、ベルトからボールを出し、ける体制をとった。

蓮華も、男も気づかずに前ばかり見ている。
男が飛び降りる姿勢となった。
コナンはその瞬間、ボールを勢いよくけった。
そして、人質となった蓮華を救出し、男は気絶しているのでそのままにしておいた。

「し、新一・・・・」
蓮華、いや、今は蘭としておこう。
蘭はなきながらコナン、いや新一に抱きついた。
「蘭…よかった…」
新一も優しいまなざしで蘭を見つめる。
蘭も同じように見詰めた。
２人はそうして一つになった。

ジェットコースターが終わると、客が呼んだ警察により、男は即逮捕された。

蓮華はみんなのもとに帰ると笑顔でトロピカルランドで一日を過ごした。

夕方になると、蓮華がいきなり、「ごめんね！」と謝った。

みんな、いきなりのことだったので一斉に蓮華を見た。
「蓮華？」
歩美が不思議そうに尋ねる。
「私が、人質になって、一日ん半分くらい使っちゃったでしょ？一日しか行けないのに、短い時間にしちゃって。本当に、ごめん。」
哀しそうに言う蓮華に皆は目をパチクリさせた。
「何言ってるのよ、蓮華！そんなこと、仕方ないじゃん！そのこと引きずってたの？」
歩美はにっこり笑って言った。
蓮華はその言葉を聞いてえ？とても言いたそうな顔をした。

「そうだぜ？しかたいことじゃんか！」
「そうですよ！そんなこと、気にしなくて平気です！」
「同感よ、蓮華。」
「蓮華は悪くねーって。」
みんなの言葉に蓮華は涙を流した。
こんなに自分は幸せなんだと、今一度感じたのであった。

「でも、蓮華ってすごいね！」
「え？」
「だって、哀ちゃんを守るために犯人の腕をけるんだから！空手でもやってるの？」
「え…う、うん」
「へぇ～！まるで…」

（まるで…蘭お姉さんみたい…）
歩美はそう思ったとたん、言葉を止めた。
「歩美？」
（そういえば、蓮華って蘭お姉さんに似ている。もしかして…蘭お

姉さんって…）
歩美はそう考えていた。
「歩美ぃ？」
蓮華は不審に思い、どうしたのかと思った。
しかし、一向にこたえようとしないので、少しの間だけ放っておいた。
（そいえば、蓮華が着た途端、蘭お姉さんに会っていないような…！まさか…まさか…
んなわけないよね？普通の人が縮んだり…でもよ？でも本当にもし…）
「お～い、歩美君！帰るぞ！」
博士の声を聞いて歩美は我に返ると、みんなの後ろ姿が見えた。
「あ、待って…」
大声で言うはずが蓮華の後ろ姿を見た途端、蘭とかぶった。

どこかでみた、優しげな背中が歩美には蘭と見えた。

（まさか…本当に…）

考え

私、吉田歩美。
帝丹小学校二年生！一応、コナン君のことが好きだけど、失恋ってことはわかってる。
だって、コナン君と蓮華、両思いなんだもん。
二人とも、付き合ってるって感じ。
それを知ってるのは、私と、哀ちゃんだけ。
元太君も、光彦君も、そしてクラスメートも知らない。
私は一応秘密にしてる。
だって、蓮華になにかあったら困るもん。
蓮華は優しいの。
私が蓮華に悪いことしても、一切私の悪口を言わず、私が犯人ということも言わなかった。
でも、コナン君にはわかっちゃったんだってね。
蓮華は、コナン君にしか見せない顔を持っている。
とてもかわいらしくてとても素直な顔。
コナン君もそうだ。
蓮華にしか見せないような顔を持っている。

いいなぁ…
そういう関係、ほしいなぁ…

私はそんなことを考えながら、自分の寝室にいた。
今日は日曜日。
昨日言ったトロピカルランドのことで、楽しかったことなど考えていた。

「そういえば…」

私はふと、昨日のトロピカルランドから帰る時のことを思い出した。

蓮華ちゃんの後ろ姿。

たしかに蓮華ちゃんだけど、まるで蘭お姉さんだった。

蘭お姉さんみたいに優しい心の広そうな背中をしていた。

私の憧れの蘭お姉さんにそっくりだった。

背中の中央まで伸びているサラサラの後ろ髪を左右に動かして、とさかのような髪型。

蓮華ちゃんと蘭お姉さんっていとこ？いとこってよく似るって聞いたことがある。

でも…もし違うとしたら…

違うとしたら…

蘭お姉さん＝蓮華ってことになるよね？

他人の空似にしては似すぎてる。

蘭お姉さんにあって確かめてみたい。

私はそう思って途端、電話の受話器を取って毛利探偵事務所にかけた。

トゥルルルー

トゥルルルー

機械音が私の耳に入ってくる。

ガチャッ

あ…出た…

『はい、毛利探偵事務所。』

え…誰だろ…大人びたこの声。しかし…

どう考えても女の人…！！！

まさか、おじさん浮気？

それとも、依頼人？

でも…ふつう依頼人が出るわけないよね？

「あの…誰でしょ？」

『あぁ、妃英理といって、毛利小五郎の妻よ。弁護士として妃と名乗っているわ。』

「そうなんですかぁ…」

なんだぁ…よかった。浮気してなかったのね…

『それで？どなたかしら？子供っぽい感じするけど…』

あ、ばれてた…

「あの、歩美っていうんですけど、蓮華ちゃんいますか？」

『え…？蓮華・・・？あぁ、蓮華ね、いるわよ。ちょっと待ってて。』

どうしたんだろ？蓮華ちゃんのこと知らないの？
ていうか、呼び捨て・・・
他人、ってことじゃないってことだよね？

私はそんなことを考えながら蓮華が出るのを待った。
そのとき、こんな声が聞こえた。
「・・・ん！お・・・ちょ！でて・・てよね・・・！」
「ちょっと、ま・・・よ！もうす・・・いく・・・よ！」

この会話の前に、確か…「蘭」って聞こえたような…

それって私の気のせい？
私はそのまま考えながら蓮華を待つ。
蓮華はいったい何者？
蓮華は…

蘭お姉さんなの？

まさかね。
でも、心の奥ではすごい疑ってる。

間違っててもいい。

どうなんだろう？
蘭お姉さんにあって…話を聞いてみたい。

『歩美？』
蓮華の声が、一瞬蘭お姉さんの声に被った…。

「あ、蓮華・・・」
『歩美、どうしたの？』
「蓮華ってさ…蘭お姉さんがいるところ、知ってる？」

『え…』

なに、その反応…
何か…隠してる…って感じ。

「知ってるの？」
『え…っと詳しくは知らないんだけど…外国にいるって聞いた。』
「新一お兄さんは？」
『…たぶん、新一…お兄さんもいってると思うよ？』

今…新一とお兄さんのところ、間置かなかった？
気のせいなだけ？
『それがどうかした？』
優しい声でいうところも蘭お姉さんにそっくり。
「蓮華って…蘭お姉さんと何か関係があるの？

それか・・・

蓮華は…

蘭お姉さんなの？」

考え（後書き）

とうとう聞いてしまった歩美ちゃん＼（゜ロ＼）（／ロ゜）／
どうしましょ・・・！
→って、じぶんでかいてんだろーが！

真実は教えられない（前書き）

とうとう聞いてしまった歩美。
それを聞いて蓮華は、どうこたえるのか…
そして、真実は…

真実は教えられない

『・・・』
答えない蓮華。
そりゃそうだよね、いきなり言われて驚いてるもんね。
「蓮華・・・違う…よね？」
違う…そう言ってほしい。

『そう…だよ！私が蘭お姉さんなわけないじゃない！蘭お姉さんとは、いとこ関係。だから空手の技ができるの！さっきもいったけど、蘭お姉さんは外国にいるの。いつ帰ってくるかわからないんだ…』
やっぱり、そうだよね…蓮華が蘭お姉さんなわけないもんね。
私はそう自分に言い聞かせて納得した。
「ありがと…なんか似てたから…」
『い、いとこ関係だからだよ！』
明るく言う蓮華。
やっぱり、そうだよ！
何を考えてたんだろ…私。
「ありがと。それじゃぁね、また明日。」
私はそういうと静かに受話器を置いた。
「歩美？誰に電話してたの？」
「お母さん…」
お母さんの言葉に私はにっこり笑って
「お友達！とっても優しい子なの！」
と答えた。

でも・・・どこか・・・私は笑いを作っていた。

心がもやもやしてる。
心が納得してない。
心に何か引っ掛ってる。

なんで？すっきりするはずなのに…。

「歩美、ごはんができたわよ！今日はカレーだからね。」
夕ご飯・・・か…

なんだか、のどに通らなそう。
絶対何かが引っ掛ってる。
私はそんなことを思いながら、洗面所へ行って手を洗っていた。
どうやってダイニングについたかわからないけど、蓮華のことで頭がいっぱいだった。

そして、ご飯を食べ終わり、お風呂に入って歯を磨いて…

そうして考え事ばかりの一日は終わった。

次の日―。

ピピピピピピッ

ピピピピピピピッ

ピピピピピピピッ

目覚まし時計が私の耳を困惑させ、目をこすりながら私は暖かいベッドから出た。
うるさい目覚まし時計を止めて、ダイニングまで歩いていくと、そこにはにこにこ顔のお母さんがいた。
「おはよう、歩美ちゃん。よく眠れた？」
「うん…まだ眠い…」

「ほらほら、早く顔を洗ってきなさい？ご飯が覚めちゃうわよ？」
「は～い…」
私はまだ眠そうにのっそりと洗面所へ向かった。
バシャバシャと顔を洗って食卓に着くとおいしそうなごはんが私の目の前にあった。

お母さんと一緒にご飯を食べ始めると口の中はご飯の味とおかずの味のミックスになっていく。

おいしいご飯を食べ終わると私は急いで歯を磨いてランドセルをしょって玄関へ向かった。
「それじゃ、いってくるね！お母さん！」
「行ってらっしゃい！」
「行ってきまーす！」
元気のよいあいさつで私は学校へと向かっていった。

「コナン君、蓮華！おはよう！」

「おはよう、歩美」

「おはよ…」

相変わらずコナン君は眠そうだった。

蓮華と目を合わせた時、私はそっと謝った。

「ごめんね、昨日は。」

「いいの！全然平気！」

蓮華は笑顔で言ってくれた。

（ごめんね、歩美ちゃん。本当は…私が毛利蘭なの…ごめんね…真実は…教えられないよ…）

蓮華がそう思っていることは…

私は夢に思わなかった。

真実は教えられない（後書き）

感想待ってます！！

少年探偵団の考え（前書き）

歩美視点です！

最近歩美視点が多くなってきましたね…

少年探偵団の考え

やっぱり…

やっぱり蓮華って蘭お姉さんに似ている。
いとこだから？
にしては似すぎている。

蘭お姉さんが子供になったって感じ。

今、私は学校の図工室で蓮華を観察している。

さっき、コナン君ファンの子たちが蓮華に嫌がらせをした。
蓮華がせっかく描いた絵を水で汚してしまったのだ…。

「あ、ごめーん！足が滑っちゃってぇ～！」
いかにもわざとらしい謝り方。
私にも、コナン君にも、哀ちゃんにも、もちろん少年探偵団のみんなもわかっていた。

そうして、もう一人のグループの一人が今度はバケツらしきものを持って転んだように倒れたのであった。
そして、園バケツの水は見事に蓮華にあたり、蓮華はびしょ濡れ状態となった。
「蓮華！」
コナン君がいち早く駆けつける。
少年探偵団も、私も哀ちゃんも一斉にグループ人を睨んだ。
「あら～、ごめんなさいねぇ～足が滑っちゃってぇ～」

謝っていない…

「あなたたち、最低ね。」
「ほんとうです！どうしてそんなことするんですか！？」
「お前ら、調子乗ってんじゃねーぞ！？」
哀ちゃんも光彦君も元太君も激怒。

「そうよ！蓮華、何かいったら！？」
私もそういった。

でも、蓮華が言った言葉はこうだった。

「私は全然平気。それより、佐々木さん（グループの人の苗字）、水かからなかった？転んで、痛かったでしょ？気をつけたほうがいいよ？」
優しく言う蓮華。

グループの人たちは予想外のことだったらしく驚きで目を見開いていた。
しかし、それとは正反対にコナン君はひどく怒っていた。
私たちよりも怒っていた。
怒りに手が震えている…。
なんか…怖い…

「佐々木…話がある…放課後、屋上に来い…」
怖い顔をして言うコナン君…

しかし、佐々木さんは嬉しそうに「は～い！」といったのであった。
きっと告白されるとでも勘違いしたんでしょ？

「江戸川君、私も行くわ。蓮華がこんなことされて黙ってられるほど蓮華みたいに優しい人じゃないのよ。」
冷たく言い放つ哀ちゃん…

うそぉ…
2人とも人が変ったように佐々木さんを睨んだ。

「蓮華、私のジャージー貸すわ。」
「いいよ、私のあるから。ありがとね、みんな！」
蓮華はにっこり笑って教室に戻り、着替え始めた。
私は蓮華の優しさ感激した。
私だったら泣き叫んでる。
そして、先生に言いつける。
でも、蓮華はそんなことをしなかった。
蓮華は広い心でいじめを受け止める・・・。
すごい…強い…

そうやって、この事件が大ごとにならずに放課後へと時間は運んで行った。

屋上にて―。

「それで？なんですの、話って！」
ウキウキしながら話す佐々木さん…可愛そ。
「なぁ…なんで蓮華ばかりいじめるんだ？」

「へ？」
「どうしてだ？蓮華をいじめて何になる。」
「だってぇ、工藤さんって、めっちゃくちゃうざいしぃ～」

「気持ち悪い声出さないほうが身のためよ、佐々木さん。」
哀ちゃんが不敵な笑みをしながら佐々木さんに言い放つ。
あ、そうそう、今私は屋上のすぐそばにある柱で三人を観察してる。
「なによぉ〜！」
「てめぇ、一回殴られたいか？」
「べ、別にぃ〜」
「一応言っておくけど、江戸川君は蓮華のことが好きよ？」
「は？」
「江戸川君と蓮華は両想いってこと。でも…蓮華は気づいてないようね…まったく、鈍感もほどほどにしてほしいわね…」
嘘…
本当は付き合ってる感じのくせに…。
まぁそれも作戦のうちなのか…

「蓮華に謝りなさいよ！！！」
哀ちゃんの言葉が夕日に響く…

その声を聞いて佐々木さんが言った言葉は何だっただろうか？

信じられる言葉ではなかったことは確か…

最低な女。
私はそう思った瞬間だった。

少年探偵団の考え（後書き）

感想待ってます

最低な女

哀ちゃんの言葉が夕日に響いた時、佐々木さんが言った言葉…

普通は、
「わかったわよ…謝ればいいんでしょ？」
とか言うはず。
たとえ、嫌だったとしても、
「はいはい、謝るんでしょ？」
とでもいうはず。
でも、この女は違うかった。

「いや！私が何でそんなことしたくちゃならないの！私はねぇ…工藤さんが大嫌いなの！何で頭下げなくちゃいけないの！？それに…工藤さん、もう今頃息してないんじゃなくて？」

え…

息してない…？

どういうこと…！？

私は何もできずそのまま三人の様子をまじまじと見ていた。

「どういうことだ！！！」
「蓮華に何かしたのね…！」
2人とも黙っていられない様子。

私もそんな感じだった。

蓮華…何がったのよ…どうしちゃったの…！？

「ちょっと待って！もうすぐ私の部下が来るわ。」
「部下…？あなたは社長さん？よくそんな知識があるわね。」
「あら、そのセリフあなたと、コナン君と、工藤さんにぴったりじゃなくて？」
「私たちは特別。あなたたちにはわからないものでできてるって言ったほうがいいかしら？」
「どういう意味？」
2人とも冷静で余計怖かった。
ていうか・・わからないものって？
もしかして…蘭お姉さんの関係してる…？

「簡単にいえば、あなたたちとは関係がないって言ったほうがいいかしら？それと、あなたがわかるような簡単な意図ではできてないわ。小学二年生のあほらしい知識ではね。」
う…っなんか私たちバカにされてない？
ていうか、哀ちゃんたちが持ってる知識って、もしかして…もしかしたら蘭お姉さんたちぐらい？

そう考えれば…なんとなくわかるような…

「まぁ…どうでもいいわ。あら、来たわね…」
屋上の扉から部下（？）が来た。
その部下は、なぜかボロボロだった。
「ちょっ、どうしたのよ！何が…一体…！」
「そ、それが…」
部下の話によると、蓮華を襲おうとしたところ、途中に元太君と小島君が来て、三人で戦ったらしいこと。
さすが、私たち少年探偵団…！

でも、
ほとんどは蓮華が倒したらしい。

「く…っ」
「でも！工藤さんの足をねんざさせました！」
「あら！ありがとう！」
「何！？蓮華の足を！？」
な、なんですってぇ！？
蓮華の足をねんざさせましたぁ！？
私は許せない気持ちで佐々木さんと部下を睨んだ。
その視線に気づいたのか、私のほうを向き…

あ…目が合っちゃった…！！

「あらら、もう一人、客人がいたようですわね。」
その言葉にコナン君と哀ちゃんが私のほう向いた。

「よ、吉田さん！？」
「歩美ちゃん！」
「あ、あはははは」
私はもう笑うしかないと思っていた。

でも、笑えない。

無理して声を出してるけど、すぐに私は佐々木さんを見た。
蓮華に最低なことしたやつ…

許せるわけない…！

そう思ったとたん、私は佐々木さんの胸ぐらをつかんで、気がついたら、屋上から突き落とそうとしていた。

どうやってあそこまでさせたか分からない。
でも…私はこのとき、突き落としたくてたまらない気持だった。

「やめなさい、吉田さん！！！」
「歩美！やめろ！」
「いやぁ～！はなしてぇ！」
「佐々木さん…地獄へ落ちてぇ！！！！！」

私は手に思いきり力を込めて押した…

最低な女（後書き）

歩美ちゃんがだんだんメインになってきましたねぇ…

どうなる！？

捕まった

私は、屋上で佐々木(最低な女)さんを目の前にしてはぁはぁと息が荒かった。

「歩美…たとえ・・・相手が最低なことを言ったって、ひどいことを言ったって、殺してしまったら歩美が悪くなっちゃうのよ？歩美は…悪くないのにそうなってしまうんだよ？
そんなの、私が嫌だよ…！」

蓮華の言葉に私はハッと我に返る。
何やってるんだろ…私…
最近の私、どうかしてる。
蓮華が来てから…
私が私じゃなくなってる…
なんか…私じゃないみたい…。

というより、どうして蓮華がここにいるというと…

私が佐々木さんを突き落そうとしたときにいきなり蓮華が私を押し倒したの。

そして…
蓮華が叫んでこういった。

「歩美！私は平気だから…！―――こっち向いて！ちゃんと私の顔を見て！私は…足を痛くても、全然平気だから！！歩美が悪者なっ

たらダメ！！」

蓮華は私の頬を両手でしっかりと押さえ、無理やり目を合わせられた。

真剣な潤っている瞳、強そうな顔。
それでもとてもかわいい顔。
空手がうまくて優しくて、蘭お姉さんにそっくりな顔。

そんな彼女が羨ましくて私は嫉妬ばかりして殺そうとまでしたのに、
優しく笑顔で私を友達として迎えてくれた。

はじめ、変な子っておもってたけど、なんだか、それが普通に思えてくる。
蓮華の影響ね…。

「蓮華・・・私…」

「歩美、私のためにありがとうね。」
優しい微笑みで私を見る。

素敵な笑顔。

いいなぁ、私もこうなればいいなぁ…

蓮華って素敵だな…私の憧れだな…

そして、今に至る…

「蓮華、私どうかしてた…」
震える声でいう私。
自分でもわかった。
蓮華はそんな私を引きずる足で抱きしめてくれた。

「ありがとう…ありがとう…」
と言いながら…

「ちょっと、ちょっと、どうやってここまで来たのよ！」
佐々木さんはそんな私たちの言葉を引き裂くような声で言う。
私は佐々木さんを思い切りにらんだ。
佐々木さんはそれを見てもちっとも関係ないとでも言いたそうな顔をしてフンッといった。

「元太君と、光彦君のおかげよ…。二人が私に場所を教えてくれたの。だから、びっこひいてでも行かなきゃって思った。歩美がいなかったし、コナンも、哀も・・・だから心配になっちゃって。」
まるで私と蓮華の世界。ほかの人がいないような真っ白な純粋の世界。

「蓮華、大丈夫か、足！」

「うん、全然平気。でも、歩美が先にやってくれてよかったね、コナン。」
「へ…」
私は不思議でたまらない声を出した。
どういうことだろ…

「だって、きっとコナン、今にも飛び掛かろうとしてる顔だったもん。よかった、歩美で。コナンがやったら、本当に嫌だもん。」
コナンのことが好きってことがここで分かる。
わたしはそのとき、悲しむはずが何だかうれしくなった。
それよりか、やった！素直になってくれた、って思った。
変な私。
いつも嫉妬しまくってたのが、蓮華のおかげでそんなこと思わなくなった。

「ったく…でも、よかった。蓮華が元気で本当に良かった。」
熱のこもった言い方。
いいなぁ…そんな関係作ってみたい…
「コナン…ありがとうっ！」
満面の笑顔でいう蓮華は一番輝いている。
女の私でもグラッときた。
「ちょっとちょっと、いちゃつくのはあとでして頂戴。これから佐々木さんを先生のもとへ連れて行くんだから。」

「フッ、そんなの無理。学校は広いんだから。」
「なら…先生が来てくれるっていうのは？」
哀ちゃんの言葉と同時に我らの担任、小林先生が屋上に来た。
「こ、小林先生！！」
私は思わず甲高い声を上げてしまった。
でも、いいよね？

佐々木さんも部下も驚きの顔でいっぱいだった。

「話は小嶋君たちから聞きました。
佐々木さん、米木さん（部下の名字）、職員室まで一緒に来てもらいますよ？逃げ出したら、両親にご連絡をし退学処分とさせていただくか、一年の休学とさせていただきますね。まぁ、一応三か月間の休学とさせていただきますから。」
にこにこ笑顔でいう先生…

ある意味こわっ！！

「工藤さん、大丈夫だった？」
「はい！」
「じゃぁ、おうちの方に連絡取って車用意するわね！」
「その必要はないわ。阿笠博士がもう車を用意してくれたの。」
哀ちゃん…先生には敬語ぐらい使ったらいいのに…

私はそんなことを思いながら蓮華に「ありがとう」とつぶやくような声で伝えた。
蓮華はにっこり笑って私に抱き着いた。
私は抱き返して蓮華にとても感謝した。

大好き・・・
蓮華！

「私！蓮華に一生ついていきたい！」

私がこういったとき、蓮華の反応に気づいていればよかった。

「え…」

初めは驚いていたんだと思った。

でも、今から思うと、非現実的なことを言っていたのだった。

私がそれに気づいたのは、蓮華がすべて話してくれたのは、私が中学二年生になった時だった。

捕まった（後書き）

歩美ちゃんメインでした！
今日で２０１１年が終わりですね～！
来年年女、年男の人って…何人いるのか、知ってますか？
聞くところによると、１０２２万人だそうなんです！
日本の人口の８％って聞きました。
干支で３番目に低いんです！間違ってたらごめんなさい！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8299z/

兄妹

2011年12月31日20時54分発行